

第6号 華山会報

平成13年4月11日
財団法人華山会



私の華山研究

常葉学園短期大学教授・常葉美術館館長

日比野 秀男

私は昭和四八年三月に慶大大学院修士課程を修了した。当時、華山の研究者として知られる菅沼貞三先生が東洋美術史の教授として在任されており退職されたのは、私の修士課程の二年の頃であった。多くの方々からさぞかし在学中には菅沼先生から華山について教えられたであろうと云われたが、私はまったく聞いたことはなかったし、迂闊なことに菅沼先生が華山の研究者であるということすら知らなかったのである。菅沼先生の講義はもっぱら日本美術の古い時代のものであり、奈良平安時代が主でせいぜい鎌倉時代ぐらいまでであった。当時は仏教美術が専門でないのかと思ったりしたものである。ただ一度だけ東京美術倶楽部で開催された華山の展覧会に連れていっていただき、その帰りに近くの美術商で華山の作品を拝見したことがあったくらいである。

その後、私が華山について関心をもったのは、静岡県立美術館の開館記念展として「東西の風景画展」(昭和六一年四月)を準備しているときであった。この展覧会は日本、中国、ヨーロッパ、アメリカの山水風景表現を比較して展示しようとするものであった。その中で江戸時代後期の山水表現の代表作として華山の「千山万水図」を出品していただきたく、何回も秋田へお願いに伺ってからである。結局、展覧会の直前にご所蔵家が亡くなり図録には掲載されているが展示はできなかった。展示が実現したのは翌年に開催した「近代の日本画―伝統と革新の一世紀展」においてであった。

そして、「千山万水図」に華山の海防思想が込められているとの考えに至ったのは平成元年の秋、常葉美術館で開催された「華山名品展」の時である。

江戸時代の画家でとりわけ人々に敬愛されるとともに多くの研究成果が挙がっているのは尾形光琳、田能村竹田などがあるが華山ももっとも文献の多い画家である。その文献の山を見ればだれしも自分が研究をしようとは思わなくなってしまう。そうした中で私は自分自身の年齢と華山の年齢とを重ね併せながら作品について考えていると彼の思想というものが如実に見えてきたような気がしてきた。そうして平成二年から七年位にかけて次々と考えが進展していった。自分自身と華山とが見えない糸で結び付いているのではないかと思ったりも何回かあった。それはある一面から言えば義憤と呼んでよいようなものでもあった。

作品を見るということは、いつでも同じようにできるものではない。画家は画囊を肥やすと言って万巻の書を読み、万里の道をゆくとも言われる。研究も同じように回りを回して考えが進んでゆくものであると思っている。



華山サミット開催を

田原町議会議長

川口 完一

財団法人華山会が発足してはや十二年、平成五年には、田原町博物館も完成して、渡辺華山先生の顕彰を柱とする田原町の文化施設も一層充実してまいりました。また、明治四十三年「華山会報」第一号の発行で頓挫していた会報も、平成十年には改めて創刊され、はや第六号の発行を数えることになりご同慶のいたりであります。会報発行の下支えとなっている華山・史学研究会の活動もますます充実され、華山文献の研究のみならず、研修視察も回を重ねられて、各地の華山先生ゆかりの方々との交流も盛んになってきていると伺っています。

議会活動に携わっている議会人として思うのに、各地の華山先生ゆかりの方々が一同に会して、語り合ってみてはいかがなものであるうかと

思う次第であります。

華山先生の旅行記の残っている地域では、各地において多くの碑文や記念碑が残され、地域住民の誇りとなすとともに、地域発展のため盛んに華山先生の顕彰が行われています。

「毛武遊記」の群馬県桐生市では、地元華山会が盛んに顕彰活動を行っていますし、「游相日記」の厚木市・綾瀬市では、市内の文化財めぐりコースが設けられているそうです。また、「訪甄録」の熊谷市では、多数の記念碑が立てられています。



厚木六勝図
熊林の曉鴉



「華山ゆかりの道」
綾瀬市教育委員会

また、地元では、「参海雑誌」の赤羽根町、渥美町、伊勢の神島、「四州真景図」の千葉県、茨城県等華山先生の残された記録や絵画を振り返って当時を語り合つのも日本文化の理解を深める一助になるのではないかと思います。関係の市町村に呼びかけて、「華山サミット」を開催してみてはいかがなものでしょうか。

目次

題字「華山会報」華山会理事	小澤耕一
私の華山研究	日比野秀男
「華山サミット」開催を	田原町議会議長
目次	
画家渡辺華山の心象	重文 『佐藤一斎像』
退役願書之稿 (2)	田原町博物館所蔵品から
華山と桐生	桐生 華山会会員
華山劇から学んだこと	中部小学校児童
紀行文『游相日記』 (4)	田原町博物館から
田原町博物館から	案内

今回は紙面の都合により華山史跡・各地の博物館を訪ねてはお休みさせていただきます。

画家渡辺華山の心象

重要文化財 佐藤一斎像

文政四年（一八二二）絹本着色

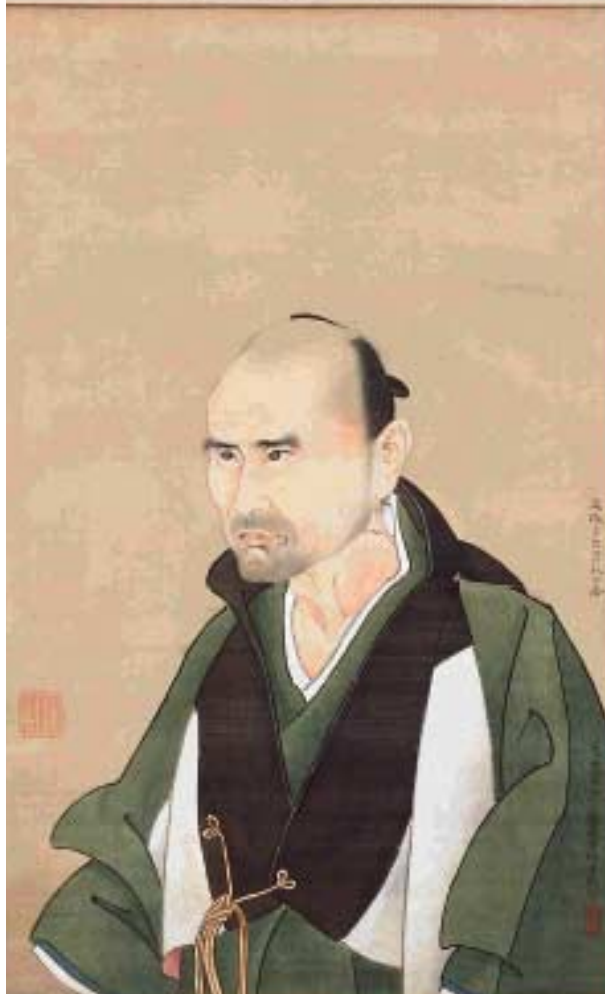
縦八〇・六cm 横五〇・二cm

東京国立博物館蔵



一毫似我、謂之我可也、一毫
不似我、謂之非我可也、其似
与不似者貌也、存於似与不似
之外者神也、是神也、無生滅
無古今、盤為川嶽凝為星辰、
聚為風霆散為煙雲、磅宇
宙無有不存也、然則不似
者亦尽我也、而況其似者、
誰謂非我真乎哉
甲申長夏上澣三日
五十三翁坦自題

贊の意味は「似るも似ないも筆の
技である。我が像はよく似て真を表
す。これは神わざである。」



佐藤一斎は、安永元年（一七七二）
に美濃の岩村藩家老佐藤信由の子と
して江戸に生まれました。若年から
前藩主の三男衛と共に儒学を学びま
す。一斎が二十二歳の時、大学頭林
信敬に入門しますが、同年信敬が没
し、幕命により衛が、林家第八代の
大学頭をつぐと、一斎は衛すなわち
述斎の門人となります。三十四歳で、
一斎は林家の塾長となり、述斎が没
するまで、林家の門人として過こし
ます。没した年、七十歳ではじめて

幕府の儒臣となり、將軍・諸大名に
招かれ、講義を行います。この肖像
画は、華山が二十九歳で、一斎五十
歳の像を描いたものです。華山は十
九歳で佐藤一斎の門下生となりまし
たので、入門後十年を経てからの作
となります。この作品の稿本として、
朱書で数字を記入されたものが残さ
れ、その精密な描写は渡辺華山肖像
画の制作順を知る上で、興味深いも
のです。対看写照による西洋的な立
体感と南画技法の融合は、華山初期

肖像画の代表作と言えるでしょう。
款記は「文政辛巳孟秋下澣 受業弟
子渡邊登拜手敬写」、印に白文連印
の「辺静・子安」を使用しています。
図中朱文方印に「文政四年辛巳三月
朔日月五星聚室壁次曆家謂之合璧連
珠係坦於五十時事」とあり、一斎五
十歳の賀印が押されています。
画上の贊は本図が描かれた三年後
の文政七年に一斎自身によって添え
られたものです。
田原町博物館学芸員 鈴木利昌

退役願書之稿(一)

前回に続き華山の自叙伝ともいうべき『退役願書之稿』の内容を紹介していきますが、今回紹介する部分には、華山の七人の兄弟についての記述がありますので、華山の兄弟について『渡邊家系譜』から抜粋して紹介します。

茂登 幼名 里ん

寛政七年（一七九五）十一月十二日生まれ。

上州桐生岩本家三代茂左衛門（商家）に嫁ぐ。

一男一女があり、喜太郎が後継となる。

慶応三年（一八六七）七月二十六日没。

まき 幼名 寿て

寛政十二年（一八〇〇）二月十二日生まれ。

永井左衛門（旗本）の家臣佐藤藤助に嫁ぐ。

天保二年（一八三一）正月十六日没。

熊次郎 後に定意

享和三年（一八〇三）正月十三日生まれ。

文化十一年（一八一四）二月十一日出家し、芝増上寺山内寮主建竜和尚の弟子となる。同年

四月、上州館林善道寺で定覚上人の弟子となり、剃髪して名を定意に改める。

文政十三年（一八三〇）七月二十六日武州熊谷宿釜屋音次郎方にて客死する。

喜平次 幼名 留之助

文化二年（一八〇五）八月三日生まれ。

母方の姓河村を名乗らせる。

水野伯耆守（旗本）の家臣堀田又左衛門の養子となる。

助右衛門 幼名 於菟弥

文政十二年（一八二九）六月十三日没。

文化四年（一八〇七）十月二日生まれ。

文化十二年（一八一五）岡崎藩本多中務大輔

の家臣中山幸次郎保秀の養子となり、中山順蔵

保道と名乗る。登没後も生存する。

継 幼名 縫

文化七年（一八一〇）七月十一日生まれ。

文化十年（一八一三）十二月二十七日酉刻過

ぎ、痘瘡で早世する。

五郎

文化十三年（一八一六）三月十六日生まれ。

如山または華亭と号し、華山や椿山に師事し

書画をかく。

天保八年（一八三七）七月十二日病没。

それでは、前回の続き、華山が儒者になろうと

決意してからのことです。



板橋の別れ

三 板橋の別れ

私の兄弟はみな幼くて、七人 五郎はまだ生まれていません。ほどいきました。母の手一つだけで老祖母や病気の父、私たち兄弟がその日の生活をしているという状態でしたので、右のような余裕

(儒者になること)はありませんでした。貧窮はものすごくはげしく、筆紙に尽くせるものではありません。貧窮のため、弟たちは寺に奉公に出したり出家させたり、妹は旗本に奉公に出したりしました。

そのような寒苦艱難のなか、私が十四歳ばかりの時に、幼少の弟を奉公に出すために、板橋まで送って行ったことがあります。雪がちらちらと降っているなか、弟は八、九歳でしたが、見も知らぬ荒々しい男に連れられて、後ろを振り向き降り向きながら別れたことは今も眼前に浮かんできます。右に述べた弟は定意といい、後に熊谷宿で客死しました。



華山の末弟 五郎

『幼少の弟を私十四歳計の時、板橋迄生別れに送り参り候時、雪はちら／＼ふり来、弟は八、九歳にて見もしらぬあら男に連れられ、跡を振り振向わかれ候事、于今目前に見え候如く御坐候』

華山十四歳は、文化三年(一八〇六)のこと。この時、熊次郎は四歳、熊次郎が八、九歳なら、華山は十八、九歳。

この年齢の食い違いについて、小澤耕一先生は、『華山渡邊登』(華山会刊)の中で、諸氏の説を紹介した後、『渡邊氏家系』を根拠に、「文化十一年(一八一四)登二十二才、熊次郎は十二才と見る方が確実性が高い。」と述べている。(同書一六ページ)

この場面を、田原町立田原中部小学校では、「華山劇・板橋の別れ」として、毎年学芸会で上演している。「立志」同様第四号の会報参照のこと。

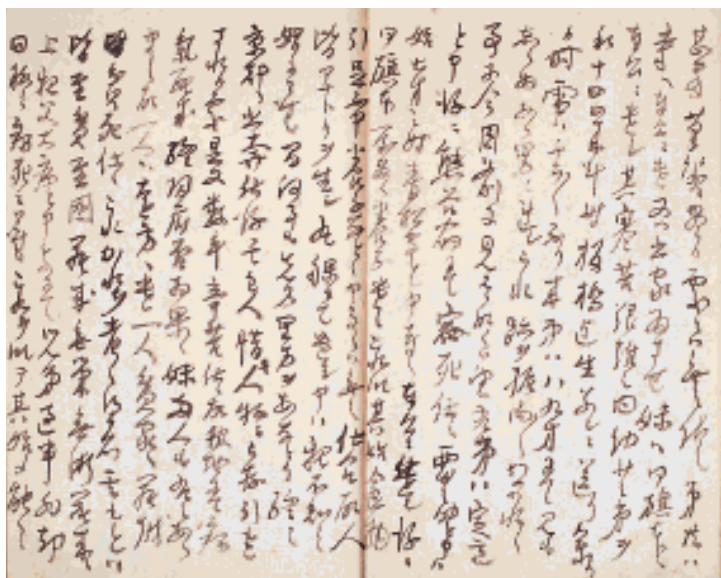
留之助という弟は、始め七歳の時、青松寺という寺に奉公に出し、後に旗本屋敷に養子に出しました。これは、もともと食べ物足りなかつたからです。養子ということは、このうえない幸せだったので、家族のものは軽く考えてしまい、丸裸同然で養子に出してしまいました。いつてみれば、孤児のようであったので、何事につけ先方が里方

をあとどつてしまい、留之助は、ついに京都に狂奔してしまいました。

後に、養子先の主人が、留之助のことを惜しい人物と考えたので、連れ戻そうとしましたが、数年間なんぎをしていたので、京都で病気になるてしまい、とうとう江戸に帰らずに死んでしまいました。

妹二人も述べたような家の状況なので、一人は遠方へ遣わし、もう一人は貧家に遣わしたところ、

重要文化財 退役願書稿 原文



貧死してしまいました。これらのことを考えてみると、そのもとは、みんな至貧至困が原因で、ほどこすべき手立てがなかった上に、父親が大病であったからで、兄弟の半分以上は、非却同様の病死でした。これらのことによって、多くの困難なことが差し迫っていたことをお察し下さい。

四 画道を志す

私の母は、近ごろまで夜寝る時に、布団というものや夜着というものを引きかぶって寝ているのを見たことはありません。破れた畳の上にごろ寝をし、冬は炬燵で寝ていました。私の父が大病でしたので、高額な薬を買い、投薬の礼を医師に渡さなければならず、毎日食べるめん類等にも事欠く次第でした。畳や建具のほかは、たいてい質に出し、なお、借金も親類から借り尽くしてしました。

わずか南鐐（二朱判銀）一片を借りに、母方の身内で本所一ツ目に住む山伏のところへ、母がただ今存生している助右衛門という弟を背負い、あえて雪の中を出掛けたことがありました。夜になつてから帰宅したので、私が足を洗う湯を沸かしていたところ、衣類を焦がしてしまい、大いに



華山の母 栄

叱られたことを今も覚えています。

このような事情でしたので、高橋文平様とまた相談しましたところ、高橋様が、

「ともかく学問などやって儒者になったところで、お金がとれるというわけではありません。いずれにしても貧を救う道が第一です。」

と言われるので、爽鳩先生に頼み、芝の白川芝山という画家に入門しました。この時、私は十六歳でしたでしょうか。

しかし、貧人なので謝礼が十分にできず、わずか二年で絵を教えることを断られてしまいました。私も、この時はかりはどついたらいいだろうと泣きしずんでいたところ、父親が、

「金陵は、両敬の大森勇三郎様の家来だから、

事情を言えば同情して下さるだろう。」

と言うので、金陵様の弟子となることができました。金陵様はこのほか同情して下され、少し絵がかかるようになりました。

しかし、半紙をそろえることもできないので、初午燈籠の絵をかき、百枚で一貫の銭をもらうことにしました。日本橋二丁目遠江屋、麹町天神たこ屋にお願いし、冬になって、この銭で紙筆を整えることができました。そうはいつでも学問をしたいと思いましたが、何分にもその時間もありませんでした。冬だったので、朝は四時頃起き、飯を炊き、その火で読書をしていました。これは、文晁や文一、菅原洞斎というものが私に同情し、絵の道にとりたててくれた節に、文晁が毎晝に起き出して絵をかいたという話を聞き、奮発したからです。子供心より馬鹿なる無駄をしたと思います。右に述べた絵が少しずつ家計の補助の仕事となり、学問をできるようになったのも、前に述べた爽鳩先生の恩のおかげです。

華山十六歳は、文化五年（一八〇八）のこと。

両敬は、武家で同等のつきあいをする関係。大森勇三郎の妻は、八代藩主康之の三女。

（続）

研究会員 柴田雅芳

田原町博物館 所蔵品から

重要文化財 喜多武清筆顔回像

(孔門十哲像の内) 佐藤一斎賛

文化十三年(一八一六)

絹本着色

縦一〇二・九cm 横三六・九cm

後学江都佐藤坦拝題

廟食千載追榮冊謚
身因道亨孰豐孰匱
謂然瞻仰冥然默識
若虚而實如愚而智
克己由己斯語請事
舜人予人其志若是
維此顔子金精玉粹
天鐘其秀物拔其萃

丙子春二月可菴源武清拝畫



顔回は、孔子と同じく春秋時代の魯国出身で、字は子淵、顔淵ともいいます。孔子の弟子の中で、徳の実践においてすぐれた才能の持ち主として、顔回・閔子騫・冉伯牛・仲弓があげられています。顔回は最もすぐれ、徳行第一に挙げられています。彼は孔子より三十歳年少でしたが、二十九歳で髪が白くなり、孔子より先に三十二歳で早世してしまいました。孔子は彼の死を嘆き悲しみました。

款記に「丙子春二月可菴源武清拝畫」とあり、白文の武清印を押して

います。喜多武清は、谷文晁の門人で、鑑定・臨模に長じた画家です。渡辺華山の文化十三年(一八一六)、二十四歳の日記『華山先生謾録』にも武清の名が多く見られますし、文政十二年(一八一九)に『南総里見八犬伝』で著名な読本作家曲亭馬琴に宛てた書簡の中に「江戸大火の際、武清宅に駆け付け、彼を助けて多くの摸本類を運び、避難したとの記述もあります。武清は安政三年(一八五六)、十二月二十日、八十一歳で没しました。賛者の佐藤一斎は、当

時大学頭林家の塾長で、田原藩の儒学者鷹見星臯に就いた縁で依頼されたものでしょう。一斎についてのくわしい解説はこの号の「画家渡辺華山の心象」を参考にしてください。

この作品は、昭和三十年二月二日に重要文化財に指定された渡辺華山関係資料の附として、同三十二年二月九日に追加指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えられました。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

華山と桐生

時の旅人 渡辺華山展 開催に向けて
本年9月・群馬県桐生市

「渡辺華山」と「上州桐生」と聞かれて皆さん、どのような印象を持たれますか？実はこの関係は決して薄くはありません。華山会員の方々には言わずもがなといったところかも知れませんが、まずは少々書かせて頂きます。

華山には妹の茂登（もと寛政七年（慶応三年）がいました。彼女の嫁ぎ先が、桐生新町二丁目で絹買次商・升屋を生業としていた岩本茂兵衛でした。兄の華山はここを頼って天保二年、五年（調査中？）、六年と三度に亘って桐生を訪れていきます。そして最初の来桐となった天保二年には『毛武遊記』『客坐録』『毛武遊記図巻』などを遺しました。これらによると華山は天保二年十月十一日、弟子の山本梧庵を伴い江戸を

出発、そして翌十二日夜半には桐生に到着しています。この時、華山は三十九歳。そして茂登は三十七歳、また亭主の茂兵衛は四十七歳でした。二人は働き者で商売は繁盛し、華山は心安く岩本家に二十四日間も逗留したそうです。そして近在の間々や足利にまで足を延ばしました。またその間、桐生の文化人とも親交し、自らの染筆作品を遺しています。彼らの名は『毛武遊記』中にも「桐生風流なる人」として記されております。つまり中央で活躍する華山によって教養と人格を認められた十数人が、当時桐生にはいたという事です。これは織都としての繁栄を背景とした当時の町衆たち、彼らが求めていた文化的欲求の、その水準の高さの一端が示されているとも言えます。

このような「華山と桐生との関係をほおっておく手はない」として、私も桐生華山会が活動を始めましたのは、未だ数年前のことであ

ります。しかし既に多くの先人たちの研究活動が脈々と続けられていたのです。彼らの探求心には頭の下がる思いがしますが、同時に桐生を中心とした両毛地区全般に、如何に華山が大きな影響を残していたかということが窺い知れます。中でも地元研究者の先達である真尾源一郎（ましお・げんいちろう明治十六年（昭和四十六年）氏は、持ち前の真摯な学究態度で多くの業績を遺されました。著書『毛武と渡辺華山に関する

新研究』は昭和二十七年、自らの古希に際し、それまでの研究をまとめ自費出版とし、全国の華山研究者に無償で配布されています。更にこの後に書き蓄められた原稿類は、没後



毛武と渡辺華山に関する新研究
(自費出版昭和二十八年発行)



田原の文化特集第十三号
(毛武と渡辺華山に関する新研究完結)
著者・剣堂真尾源一郎
(田原町教育委員会昭和六十一年発行)

になつてから田原町教育委員会により『田原の文化特集第十三号（毛武と渡辺華山に関する新研究完結）』として纏められているのは「存じの通りです。また加うるに『毛武と渡

『辺華山』(编者・豊国覚堂)の名も留めておくべきでしょう。



毛武と渡辺華山
编者・豊国覚堂
(上毛郷土史研究会昭和八年)

そして今からちょうど二十年前の一九八一年、桐生市文化センターにて行なわれました『来桐一五〇年華山と桐生展』は、地域までも巻き込んだ大きな成果として自負するところと、この時の記録によりますと、華山と合わせ市内に所蔵された関係者の作品、並びに桐生人として影響を受けた画家たちの作品など全四十六点が展示されました。またこの展

覧会パンフレットには多くの実行委員、そして多くの協賛寄付者の名が列ねられています。当時の関係者達の意気込みの熱さが如実に伝わってきます。



来桐一五〇年 華山と桐生展
(一九八一年桐生市文化センター)

このような二世紀近くに亘る時代の流れを踏まえた現在の平成十三年。桐生市は市制施行八十周年およ

び水道創設七十周年を迎えました。これらを記念し、市民有志および桐生市では、渡辺華山と桐生との関係を顕彰する企画を本年九月に計画したのです。

この企画は二本の事業を柱に計画致しました。まずは桐生市市民文化会館主催により開催される「時の旅人 渡辺華山展」の実施です。これは貴田原町関係各位のご協力を頂き、作品の借用をお願いしているのです。展示の中心となる華山作品を始め、師友関係の作品も加えさせて頂く計画にて、現在ご担当の田原町博物館の皆様にはお手を煩わせている最中でありませう。

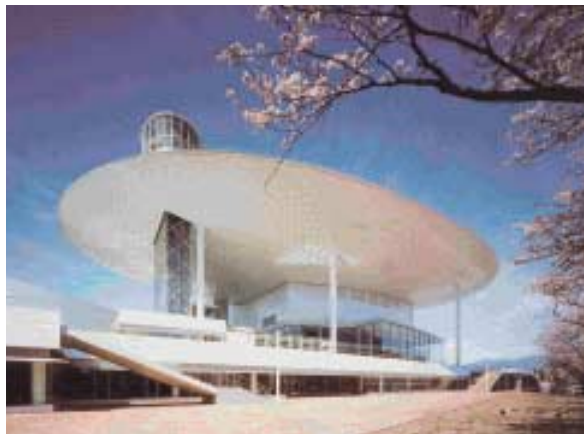
また今回の展示では、特に桐生近郊に秘蔵されている作品の発掘そして出品も、前回二十年前の展覧会時よりも更に押し進めていきたいと考えております。華山を始め、椿椿山、山本葉谷、福田半香、立原杏所、高久靄厓、渡辺小華などもぜひ出品したいと考えており、また桐生ならではの在住関係者として岩本一遷

(いわもと・いつせん文政三年、慶応四年)、栗田桐雨(あわた・とう寛政元年、安政三年)、島霞谷(しま・かこく文政六年、明治三年)、黒川真頼(くろかわ・まより文政十二年、明治三十九年)なども見所となるでしょう。これら地元からの出品作品の選定は未だ調査の段階ですが、展覧会記録とあわせ調査内容も、某かの形で纏め発表したいと考えております。

そして展覧会場の印象としては、来場される方々を「華山が目撃した江戸時代の桐生」へと向かわせる、正に「時の旅人」として誘っていきたい、というイメージを目論んでおります。

そして今企画のもうひとつの柱となるものが「渡辺華山があゆんだ毛武ウォーク」の実施であります。これは東京から桐生までの道程を、ほぼ均等な距離の六日間のステージに分けウォーキングし、かつての華山の視覚を追体験しようとするものです。またここでは可能な範囲で

『毛武遊記』の記述に則した内容にしたいと思ひ、現在実行委員により、



桐生市市民文化会館・外觀

その研究が進められています。参加者は一般募集とし、桐生近郊のみならず広く東京、またウォークラリーの盛んな埼玉県からの参加まで求めた規模の実施を計画しております。

以上このようにウォークに関しては民間主導型で企画が進行している

ということ。また前記した華山展は桐生市市民文化会館の主催事業ですが、桐生華山会等の民間の協力が加えられていること。このことからもお分かりのように、行政主導型を求めないのが「桐生人らしさ」の特質と言えるのです。そしてこんな桐生人気質は華山が来た近世後期より、そう大きくは変わっていないはずなのです。

企画の詳細は次の通りです。

桐生市市制施行八十周年記念事業
「初来桐百七十年記念 時の旅人
渡辺華山展」

会場：桐生市市民文化会館・展示室

会期：九月二十二日（土）～十月八日（祭）*火曜日は休館
です。 十時～十九時・開場

桐生市市制施行八十周年記念事業
第十六回国民文化祭・ぐんま2001
1 プレ事業

「渡辺華山があゆんだ 毛武ウォーク」

九月 九日（日）三宅坂 板橋
十五日（土）板橋 大宮 十六
日（日）大宮 鴻巣、二十二日
（土）鴻巣 熊谷、二十三日（日）
熊谷 太田、二十四日（月）太田
桐生* 九日（日）は代表ウォークのみです。

そして、私たち桐生市民は、この
展覧会とウォーキングを柱とした今



渡辺華山筆 瘦馬図

企画を、単なる華山という「客寄せパンダ」を利用したイベントとして終始させるつもりはありません。かつて華山という類い稀なる才能を呼び寄せ受けとめた、この桐生という土地の持ち得た文化度の高さ、そしてその裏付けとなった経済力を、今改めて想起する機会にしたいと考えております。これは決して「かつて繁栄していた過去」を懐かしむものではありません。時代を再考し、それを現在の私たちの教訓として捉え、そして私たち自身がこれから進むべき方向を模索していく、その手がかりにすべきであると私たちは考えています。

最後となりましたが、伝統ある華山会の会報に、私ども桐生華山会を紹介できる機会を頂きましたことに
対し厚くお礼申し上げます。

桐生華山会会員 岡 義明



渡辺華山筆 両国橋納涼之図



渡辺華山筆 花鳥帖十二図



渡辺小華筆 花鳥十二帖

華山劇から学んだこと
田原中部小学校
五年 光部正浩

ぼくが、華山役で「板橋の別れ」を演じてから三か月がたちました。今でもよく舞台でのことを思い出しています。と同時に思い出するのは、クラスの人々と、劇の中で歌われる、歌詞の意味や、華山先生について調べたことです。歌詞については、昔のむずかしい言葉が多く、家の人に聞いたり、辞書で調べたりして意味を調べました。また、合唱歌、独唱曲の歌い方もみんなできるとん研究しました。そのかいがあって、学会の他、二回のステージでも成果が出せたと思います。特に、華山先生の気持ちを考えて演技できたことが一番良かったと思います。その「板橋の別れ」から、華山先生のおさない頃のがよくわかりました。家が貧しく、弟や妹を奉公に出す。今のぼくたちには考えられないような暮らしだったこと。華山先生

はお父さん、お母さんを大事に思い弟や妹をとてまかわいがったこと。また、ある時お父さんの薬を買いに行く途中、殿様の行列の先頭にぶつかり、武士達にいたためつけられる「立志」という劇からも、先生のえらいところがよくわかります。

「名を名乗れ。」

と言われても、藩の名や父の名を言うては申しわけないと思い、声を立てずにじつとこらえていました。

こうしたことにも負けず、逆にふるいたってりっぱな人になろうと思える華山先生はすごいと思います。だから、どんなにづらい事にも立ち向かっていけたんだなあと思います。

「見よや春 大地も亨す 地蟲さへ」
華山先生のこの俳句のように、ぼくも、づらい事があってもそこから努力できる人になりたいです。そして、華山役を演じたことを忘れないでいたいと思います。

今でも、博物館へたびたび行き、いろいろと調べています。

紀行文 游相日記4)

堤が決壊した後、毎年、村人は力を合わせて、新しい堤を補築し、その堅固なことは、役人の工事に勝っていた。ただし、民の心構えは、互いに精神を集中して努力するゆえんである。もし、幕府が金を村長に渡して新築をしようとするれば、その大害は決して起こらないだけではない、その費用も半分までできたであろう。

酒井村（大住郡酒井村＝厚木市酒井）幕府領厚木を出て一里ばかりのところに、駿河屋彦八という者がいた。これを厚木の俠客といった。性格は素朴で、小児のようである。義理に背くことを憎むにいたっては、自分が死んでもやめない。自ら才能と技芸を有する者は、みんな行って（彦八に）力添えを頼んだ。もし、話し方が自慢げである時は、（彦八は）面と向かってその罪を責めなじるのみでなく、また、大いに罵る。行った人は気絶して倒れたという。酒井村は、もと某家の領地であった。領主が道に外れていたため、彦八はけしからんと怒り、大いに争った。ついに、公の裁定に及び、彦八の言うことが理にかなっているということで、領地

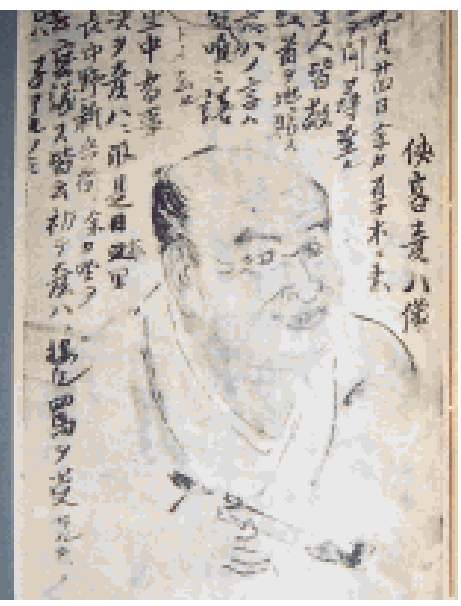
権を移されて、酒井村は幕府領となり、即ち、彦八を村長とした。

【八一ページに、丁髷姿の駿河屋彦八の肖像を描き、空欄に次のような文を載せている】

俠客彦八像

九月二十四日、私が厚木に来たのを聞いて、尋ねて来た。里人はみんな敬服して、土下座している。彦八の言うことには、みんなただただ納得して帰った。里の中で事件があると、判断を彦八に仰ぐ。この日、また、（厚木の）里長の中野新兵衛が、私の席を去って（彦八と）こつそりと話した。みんなが言う。初めて彦八に会って罵りを受けなかったのは、ただ、あなたただだと。

俠客彦八



九月二十二日の記事の間に、二十四日の記事

が紛れ込んでいる。以下、彦八とのやり取りは二十四日のことであるが、清威が駆けつけるのは二十二日のことである。蘭齋は二十一、二十三、二十四日と連続して訪れており、蘭齋とのやり取りはいつのことかはつきりしない。

彦八の人となりは、強く勇ましく智にあふれ、損得や義理人情で言葉を左右されない。私は、彦八に質問した。

「厚木は豊かというまでもないが、あなたは何か足りないと思うところはないか」私の質問は、政治の善し悪しを知り、また、その対策の当否を聞くこととしたものであると言った。

「自分は何も思うことはない。今日になれば今日のことをするし、明日は明日のことである。ましてや、人のことなどは知らない。しかしながら、今、二万両を無利息十年賦で厚木に貸したならば、郷に貧しい人はなくなり、その富もまた、計り知れないものがあるであろう。このようなことは、だれでも承知していることであるが、厚木の商売の盛んなことは、このような状態である。そうではあるが、今の殿様では、慈仁の心は毛頭なく隙を窺って

春の山ひきよせは来む姿かな



藤沢の旅舎

明やすき夜や山川の鳴りたつ歎
曳やなるこおのかねふりを覚すとて
朝霜や教化のゆひのさし処

藤沢 富屋

(四句は「藤沢(東海道の宿駅藤沢宿、高座郡・鎌倉郡の境の三町で構成。藤沢市)・富屋」の自筆だろう。次の絵からも、厚木をたつた後、藤沢宿へ立ち寄ったことが伺われる。)

【八十四・五頁に互って、旅籠屋の座敷で飯を撰つているところを描き、右側に「藤沢旅舎晝飯」の六字が書いてある。】

租税を取り立てる。殿様を取り替えることが一番良い方法であると思つた。

私は愕然と驚いて言つた。

「なるほど、百姓は田を耕作すれば領主への義理はないものではあるが、あなたの言うことのような時には、犬にも劣るものだ。昔、ある百姓の飼つていた犬が、地頭(領主)を吠えた。地頭はたいへん怒り、百姓を責めた。百姓は頭を掻きながら、詫びて言つた。私の飼つている犬は、私だけを主人と思つていて、御地頭様が私の主人であるということには知りませんので、お許し下さい、と言つたところ、地頭は大いに感心して、蒯通が斉のあることを知つて、天下のあることを知らなかつたというのと同じである、と言つて、若干の金を与えて去つたという。何と厚木の人達は、この畜生にも劣るものだ」

と言つと、彦八は黙つてしまった。

蒯通「本名は蒯徹。秦末漢初の計略家。韓信が漢王劉邦の側について斉を滅ぼして齊王となつていたが、蒯通は韓信に漢への謀反を勧めた。韓信はそれに従わなかつたが、漢

による統一が進み、劉邦が即位した後に、蒯通の策は劉邦の知るところとなり、蒯通は捕らえられた。その時、皇帝劉邦の前で、「是の時に當たり、臣、唯獨り韓信を知るのみにして、陛下を知るに非ざるなり」と言つて許された。(『史記』淮陰侯列伝)

蘭齋がまた言つた。「厚木の郷は天領になるならば上々だが、御旗本の知行でもよい」

私は言つた。「それは何故か」と。

蘭齋は言つた。「天領は願ひ事がすべて伝わることとが早く、何事も寛大で、公平である。また、上にある人御代官等は給料が少なくて私に与し易い。御旗本は、お上の威厳も薄く、代官もまた給料が少ない。故に民に勢いがあつて、代官も私に与し易く、お上もまた民の機嫌を窺う故に、勝手な訴え事もできるのである。ただ、小大名は、威勢ばかり強く、細々と調べることも行き届き、小さな隙あれば刻政(酷政のことか)を行い、御用金を申し付け、租税を取り立てることに専念する。今、厚木の風潮は、このとおりである。私は、医術をもつて、旗本屋敷へ出入りしている。厚木の豊かさを話す時は、権勢のある御旗本は、必ず厚木の富を欲しくなるであらう。これは、手を返すよりも容易に想像できる」

私は、これを聞いて愕然とした。

旅行携帯荷物図



私は、初めて厚木に来たので、知る人はひとりもいなかった。ただ、小林蓮堂が書いた清呂木宗兵衛（これは彦右衛門の分家で、今は 数文字宗白 という（彦右衛門は孫右衛門の誤り）という金物屋への手紙を携えていたので、梧庵が走ってその家に入り、手紙を渡した。宗兵衛は、絵師が憐れみを乞って訪ねて来たものと思い、返事さえもしなかった。万年屋に泊まった。主人に向かって言っ

た。

『我は三宅土佐守（田原藩主三宅康直）の由来にて、渡辺登とよべる絵など走り書きでおかしき男なり。此里にわれにひとしき人あれば、迎ひてひと夜を語りあかさまほしく思ふなり。物読（む）人か、手なと書（く）人か、歌はいかい、詩など好める人か、はなし好く人か、いつれ話をきかまほしく思えは、呼（び）たまはれ。酒と肴は、我力極（め）て進め申さんなり。吾詩画はこのめとも、人の袖にすかりて乞見めくものにあらず。君より禄賜りて優々と世を終ふものゝふにて候』
と云つと、主人は驚いて聞いて、

「これはただ者ではない。その言葉は明らかに住所までしっかりと申されたのだから、安心して呼んで参りましょう」
と云い、家内の人々にも言い残して出て、あちらこちらに頼んで歩いたと、後になって聞いた。

さて、私が来たということをも主人から伝え聞いて、訪れて来た人は、前に書いた人々である。

小園の清吉は、厚木まで送つて来たので、酒肴かつおさしみ、鮎の煮ひたし、吸いもの小鯛飯平椀、香物を与えて、日の暮れるまで、その家の盛衰、借り貸しの有無までを、それとなく聞き出して帰した。

夜になって、（お銀の夫）清蔵が息を切らして

走つて来て、私が人々と酒席を用意している中にかしこまって、ひざ頭を出したままで、お辞儀をした。宿の召使いが、菓子をつず高く盆に盛つて、「これは、小園の清蔵とかお呼びなされる御人が、あなたに差し出した物です」と申し伝えた。

私がおその人を見ると、顔は角張つて赤黒く、固くて鋭い鰐口で、眉は魚尾をなし、鬚は栗毛である。声は鐘のようで、起き上がった蝦蟆（ガマガエル）に似ている。威厳があつて重々しい村人である。私は大いに安心した。

清蔵が言つ。

「自分は荻村（荻野村か、厚木から八キロメートルほど北の地）に伯母がいる。病が重いので行つていた。



江の島の碑

江の島の小魚



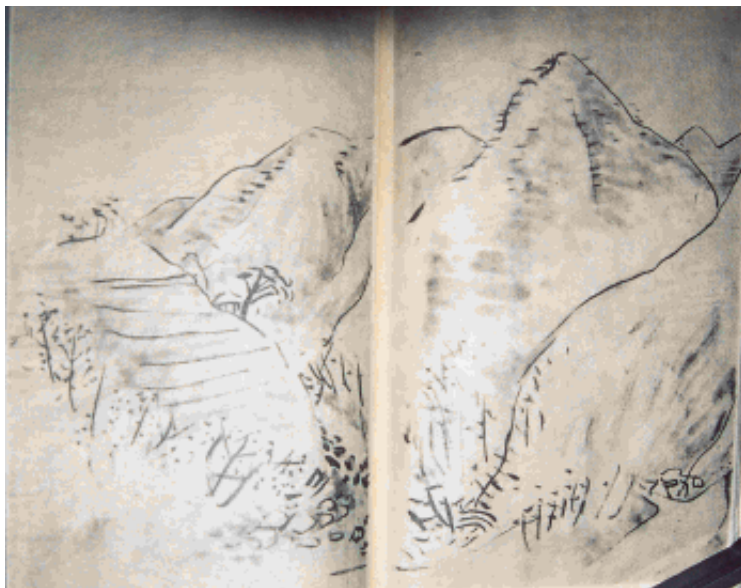
【九十五頁、碑の上部、鳳凰と額が描かれ、額の中に「大日本、絵島、建寺」などの文字がみえる。相模国鎌倉郡江ノ島（藤沢市江の島）の屏風岩に建っている碑に、「大日本国江島壺迹建寺之記」の篆額がある。これにより、文章表記にはないが、華山が江ノ島まで足をのびたことが伺われる。】九十六頁、「絵島磯窩中嶮岨浮泳者」の十字の上に、「ナキノ子」「海カジカハ」「シマタイノ子」など。三尾の小魚を描いている。】

あなたが訪れて来られたことは、もうお帰りになられたか（厚木を去られたか）どうかと、妻が言うものですから、草鞋をとこうとしたところですが、そのまま走りだして、道に出て、息子が帰って来たのに出会いました。お客様は、厚木にお

いでのなるのかと聞くと、お父さん、早く走って行った方がいいです。今まで私たちに酒を下さって、足元もおぼつかないほど酔ってしまつて帰ってきたところですよ（と言つので）、早く早くと急いで、足も地につかず、心も飛ばばかりにやつて来ました」

と、あえぎながら言つので、

大山と舟沢山か



『先（つ）酒酌（み）候へ。我いたく酔ひたれば、こよひは一夜、寝ながら語（ら）ん』
 と言つと、（清蔵は）たいそう喜んで、みんなの後ろの方につずくまつて座り、酒を飲んだり、飯を食べたりした。

この夜は、（目薬屋）常蔵と、（唐沢）蘭齋の娘十三歳が、三味線を弾き、（内田屋）佐吉が長唄というものを唄つた。梧庵と蘭齋が酔つ払つて踊り、私もまた、扇をもつて舞い、人々が笑つた。（私は）酔い伏してしまい、客が帰つたのも知らなかつた。

吸い物小鯛、さしみ鱈、鉢肴あゆ、鉢肴アイナメ、蘭齋と佐吉が出したものは、
 平皿アンカケトウフ、平皿湯トウフ

この地には硯蓋（蓋のついた皿。祝儀の席で盛る広蓋の類い）というものは無い。もともとなかつたものではない。魚類が多いので、さしみ、鉢肴など、すばやく調理するものが必要であつたからである。人もまた素朴で、肴が欲しいと言つて、たくさんはないと答えた。ただ酔いにまぎれて、みだりに注文するような浪費を恐れてのことである。江戸の酒屋のする賢さとは全く違つた。

（続）

研究会員 加藤克己

田原町博物館から のご案内

特別展 のご案内

五月三十日～七月一日
平成十三年春の企画展渡辺華山
を取り巻く人々2「渡辺華山が仕
えた主君たち」(企画展示室1・2)

七月七日～八月五日

特別展

愛知県美術館平成13年度移動美
術館 近代美術の楽しみ～自然の
かたち 人のかたち (企画展示室
1・2)

7月7日～8月5日は無料開放

九月二日～十月八日

企画展「発掘された日本列島二
〇〇一 新発見考古速報展」(企
画展示室1・2)

企画展時

5月30日～7月1日
9月2日～10月8日

観覧料 一般三〇〇円(二四〇円)
小中生二〇〇円(八〇円)

平常展のご案内

四月十八日～五月二十七日

文人画の系譜 (特別展示室)

新収蔵作品 鈴木充コレクション
(企画展示室1・2)

七月四日～八月五日

渡辺華山と弟子たち (特別展示室)

八月七日～九月十六日

渡辺華山と谷文晁門下の友
(特別展示室)

八月十日～八月二十六日

夏の風物詩 (企画展示室1)

九月十八日～十一月四日

渡辺華山と谷文晁門下の友
(特別展示室)

平常展時

毎週月曜日は休館

4月17日・5月29日・7月3日・8
月31日・9月1日は臨時休館

観覧料 一般二〇〇円(一六〇円)
小中生一〇〇円(八〇円)

() 内は二十名以上の団体の料金

田原町博物館友の会会員登録集中

申込場所 博物館受付

入会申込書に十三年度分会費千円
を添えてお申し込みください。

特典

視察研修に参加できます。

博物館だよりを郵送します。

展覧会・催し物のお知らせ



(財)華山会から

華山・史学研究会会員登録集中

申込場所 華山会館

毎月第四土曜日研究会

視察研修に参加できます。

華山会報第六号

平成一三年四月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

千四四一―二四二

愛知県渥美郡田原町田原巴江二の一

TEL 五三二・二三一・一七

FAX 五三二・二三一・一七

編集・協力

田原町博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 加藤克己

中神昌秀 仲井千恵

華山会報ご希望の方は華山会館・
田原町博物館にお申し出ください。

次回発行予定一三年一〇月一日